

日本語における漢字音の受容と 通時的変遷に関する研究

原 岡 かおる

1. はじめに

漢字の出所である中国語と日本語とでは音韻構造が音節と拍、閉音節と開音節、声調と高低アクセントなど、多くの点で異なっている。こうした言語間で語彙の移動が起きた時、その音韻構造は借用された先の言語でどのように受容されていったのだろうか。本稿で主な対象とするのは尾子音の変化、さらに従って声調について扱うこととする。

言語を問わず漢字音の変化には発音の容易さが関係すると考えられる。漢字音に関する参考文献を調べた限りでは、変化の理由として多くの仮説が立てられていたものの、調音音声学などの面から裏付けられたものは少なかった。本稿ではそれぞれの仮説を見ていき、可能な限り音声学、音韻論からの観点も盛り込む。

2. 先行研究

まず前提として中国語及び日本語の音韻史を概観する。尾子音と頭子音、声調の変化の3点について音声学、音韻論の観点も混じえつつ検討していきたい。尚、今回扱う中国語は主に唐代長安音と現代の共通語である普通語を取り上げる。また日本語は呉音、漢音を中心に、歴史上の中央語と現代の共通語に限る。

まず中国及び日本の漢字音の歴史は大きく表1の通りに分割することができる。尚、中国語の時代区分は大島 (2011, pp.102-104)、日本語の時代区分は安部 (2017, pp.76-98)、林 (2009) に概ね依拠した。

表 1 漢字音の時代区分

中国語	日本語
上古音（紀元前 8- 紀元後 3 世紀）	古音（4, 5 世紀）
中古音（6-10 世紀）	呉音（5, 6 世紀に中国南部から）
	漢音（7, 8 世紀に中国北方から、7- 世紀の中国 西北方言から）
中世音（10-17 世紀）	唐（宋）音（13-19 世紀、10- 世紀の中・近世音から）
近・現代音（17 世紀後半 -21 世紀）	

2.1 中国語の音韻史

2.1.1 中国語の音韻構造

中国語音韻学において中国語の音韻構造は頭子音、介母、主母音、末尾音、声調からなる。この内、頭子音、主母音、末尾音、声調は一般音声学でいう頭子音、母音、尾子音、声調と読み替えて良いが、介母のみ注意が要る。拗音を構成する母音で、一般音声学でいう半母音といえるが、中国語音韻学で「半母音」といえば頭子音を持たない音節で、頭子音の代わりに出現する /w/, /j/ のことを指す。本稿では基本的に一般音声学での術語を用いるが、介母のみ混乱を招くことを避けて、読み替えずに使用するものとする。中国語音韻学においては頭子音を「声母」、残りの 4 要素を「韻母」とも呼ぶ。尾子音は必ず現れる訳ではないが、尾子音を持つ音節、「閉音節」は日本語に比較して多い。

2.1.2 時代区分と資料

大島（2011）から中国語音韻史を概観する。表 1 に示した様に、中国語の音韻史は 4 分割でき、周から漢までの「上古音」（紀元前 8- 紀元後 3 世紀頃）、隋と唐の「中古音」（6-10 世紀頃）、宋から明（10-17 世紀半ば頃）までの「中世音」、清以降の「近現代音」（17 世紀半ば以降）となっている。中国語の音韻史を調べるにあたって要となる資料に韻書と韻図が存在する。

韻書は漢字辞典の 1 種といえ、部首や画数の代わりに声調、母音、尾子音で分類していた。最古の韻書は『切韻』全 5 巻（601）と伝わっているが散逸しており、中古音の研究で活用されているのはその体系を引き継ぎ、かつ欠けることなく現存している『広

韻』全5巻（1008）となる。具体的にはまず漢字を声調ごとに分け、更に母音と尾子音が共通する漢字でグループにまとめている。それぞれのグループには代表となる漢字、韻目が充てられた。この他、中世音での韻書として『中原音韻』（1324）などがある。

表2 調音点と七音

一般音声学の調音点	七音
両唇音	重唇音
唇齒音	輕唇音
齒茎音	舌頭音
	舌上音
軟口蓋音	牙音
	齒頭音
	正齒音
硬口蓋音、口蓋垂音、声門音	喉音

韻図は言わば漢字の五十音表で、ある行とある段が交差する位置にその行、段の特徴を持つ漢字がある訳だが、行は頭子音の特徴、段は母音、声調の特徴で更に細分化されて、表の中に表があるかのような体であり、韻図の代表格である『韻鏡』では43枚に分割されている。詳述すると、『韻鏡』は年代こそ唐代末期、宋代初期など諸説あるが、現存している中で最古の韻図であり、『広韻』の206韻が43枚の図表へ整理されている。五十音表でいうところの行は、『韻鏡』では「声母」と呼ばれ、「七音」、「清濁」で36種に分かれる。表2に示すように、七音は一般音声学の調音点に近く、大まかには以下のように対応させることができる。但し /j/ は硬口蓋音と見做し、/l/、/ńz/ の位置付けは異なっている。よって /l/、/ńz/ はそれぞれ中国語音韻学での呼称、半舌音及び半齒音と呼ぶことにする。

表3 36 声母

七音 清濁	唇音		舌音		牙音	齒音		喉音	半舌音	半齒音
	重唇音	輕唇音	舌頭音	舌上音		齒頭音	正齒音			
清	p	f	t	t̪	k	ts, s	tʃ, ʃ	ʔ, x(h)		
次清	pʰ	fʰ	tʰ	t̪ʰ	kʰ	tsʰ	tʃʰ			
濁	bʰ	vʰ	dʰ	d̪ʰ	gʰ	dzʰ, z	dʒʰ, ʒ	ɣ(f)		
清濁	m	ɱ	n	ɳ	ŋ			j	l	ɳʒ

清濁は「清」(無声無気阻害音)、「次清」(無声有気阻害音)、「濁」(有声阻害音)、「清濁」(共鳴音)の4種に分けられる。各声母は仮名のあ行、か行の様に代表となる字の名が付けられる。この代表となる字を「字母」という。例えば両唇無声無気音の字母は「幫」で、その声母を「幫母」と呼ぶ。尚、/ɳʒ/の発音は鼻にかかった「じ」と考えてよい。表3に36声母を示した。尚、表記は大島(2011, p.93)を基に、藤堂(1980)も参考にしてIPAに置換した。五十音表でいうところの段はまず声調、次に「等位」で分けられる。等位は母音の構成によって4種に分けたものであり、1等と2等は介母/i/を含まず、3等と4等は含む。また1等の母音は広母音であり、4等は狭母音である。2、3等はその中間である。但し3、4等の境界は明確でなく、両方に属する漢字も存在する。この漢字のグループを3・4等両属韻と呼ぶ。

この他、介母に/u/を持つものを「合口」、持たないものを「開口」と区別するが、合口の漢字と開口の漢字は同じ表に並ばない為、段では区別しない。介母に/u/を含む漢字を検索する際は合口の漢字が並ぶ表にあたる必要があるということである。

2.1.3 母音と尾子音の変化

韻書では母音、尾子音、声調によってグループ分けされ、その数は『広韻』では206韻だったが、簡略版の『平水韻』では106韻に、更に『中原音韻』では93韻に減った。これは現在でいうところの国家公務員試験である科挙に漢詩が入り、短時間で韻を踏む詩を作り易い様に一部のグループが統合された為である。特に唐代ではこのグループの統廃が進んだ。その変化は以下に示した通りである。現代中国語の漢語拼音方案では37韻にまで減少している。

2.1.3.1 3・4等兩属韻への統合

先述した等位で3・4等兩属韻に属する「仙」韻へは他の幾つかの韻目が合流した。「仙」韻は介母が /i/ か /i̥/ か、で更に甲乙に分かれていた。甲類には4等韻に属し、/en/ で終わる「先」韻が拗音化して合流し、後には /iɛn/ で終わるようになった。実際に「先」は日本語の漢音では「セン」と読むが、普通話では /ɕiɛn/ となっている。「仙」韻の乙類へは「元」韻 (/iɛm/) が合流し、後に /an/ となっている。「元」は日本語の呉音では「ガン (ゲアン)」、漢音では「ゲン」であるが、普通話では /yɛn/ になっている。「先」、「元」共にこの合流が起きる前に伝来した漢音では直音であり、普通話では /an/ に変化している。

2.1.4 頭子音の変化

2.1.4.1 無声化

中国語の中古音には清濁4種が存在したが、11世紀頃（唐代の半ばから末期）、北方方言で有声阻害音は無声音2種に合流した。無声化する際、声調が平声の音節で有声阻害音は無声有気音に、それ以外の声調の音節であれば無声無気音に移動した。尚、上海など南方においては有声無声の区別を残す方言も存在する（大島, 2011, pp.113-116）。この影響で鼻音はかつての濁音寄りに発音される様になり、鼻濁音 /mb, nd, ŋ/ が出現した（藤堂, 1980, pp.169-170）。日本語の漢字でも唐代より前に伝来した呉音では有声阻害音だったが、漢音以降は無声阻害音になっており、その影響が見られるが、詳細は後述する。

2.1.4.2 唇齒音の発生

唐代末期、両唇音から唇齒音が分かれた。発生時期の根拠は36声母（表3）に両唇音と唇齒音の区別が存在しており、その出典元である『韻鏡』が早くとも唐代末期に編まれていることに求められる。またこの変化は無声化同様、北方方言に限って生じ、南方方言では現在も両唇音が分裂していない例が見られる。分裂の基準は2つで、介母が [i] であるか否か、主母音が中舌または奥舌であるか否かであった。この基準の何れかに当て嵌まる漢字音では頭子音が両唇音から唇齒音に変化した。尚、両唇鼻音 [m] から分裂した唇齒鼻音 [ɱ] は次節で述べる脱鼻音化も経ている。

2.1.4.3 脱鼻音化

前節の変化で発生した唇齒鼻音 [m̥] は、唐代長安音で脱鼻音化して唇齒摩擦音 [v] に近付き、その後両唇軟口蓋接近音 [w] へと変遷して、現在の普通話に至る。前述した無声化の影響で生じた鼻濁音 [mb], [nd], [ŋ] も脱鼻音化して [b], [d] へと変容している。この変化も日本語の呉音と漢音に反映されているが、これも後述する。

2.1.4.4 半齒音 /n̥/ から無声有気そり舌摩擦音 /z/ への変化

/n̥/ は上古音から六朝時代にかけて [n] に近い音だったが、六朝時代から唐代の間に有気そり舌摩擦音 [z] に変化したと考えられている。証拠に六朝時代初期、仏典の音訳で頭子音に /n̥/ を持つ漢字はサンスクリットの n を表したが、六朝時代末期から唐代ではサンスクリットの ɳ へとずれている。また日本語においても呉音から漢音の間に頭子音が /n̥/ である漢字は、な行からざ行に変化している。

2.1.4.5 軟口蓋音と齒頭音の口蓋化

17 世紀、無声軟口蓋音 [k̥] は口蓋化して、無声無気齒茎硬口蓋破擦音 [tɕ] に変化した。無声軟口蓋音 [k̥] の後に介母として [i] が続いた時、狭母音である [i] の影響で舌尖が口蓋に近付き、口蓋化が起こる。中古音では介母 [i] を含んでいなかった漢字も、後世で [i] が入る様になると、やはり口蓋化した。

19 世紀初期には中国音韻学における齒頭音も同様の過程を経て口蓋化し、[tɕʰ] が無声有気齒茎硬口蓋破擦音 [tɕʰ] へと変容した。

2.1.4.6 喉音

喉音は中古音にて [h] と推定される。南方方言では [h] のままであるが、北方方言では [x] となっている。これは音対応になっており、南方方言に [x] は存在せず、その逆も同様である。

2.1.4.7 声調の変化

中古音の声調は「平声」、「上声」、「去声」、「入声」の 4 種であった。普通話になるまでに声調にも幾つかの変化が生じた為、調値は未だ不明点が多い。但し声調の変化自体は、韻書などの手掛かりから、ある程度明らかになっている。

2.1.4.8 平声の分裂

中世音では元代までに平声が2種に細分化した。この変化は先に述べた有声音の無声化を受けてのもので、元々無声無気音だった漢字は「陰平声」に、有声音から無声無気音になった漢字は「陽平声」に振り分けられた。普通話ではそれぞれ、平らな第一声、上り調子の第二声として残っている。

2.1.4.9 入声の消滅

4種の声調の内、入声はp, t, kの何れかで終わる漢字が担っていた。平声が陰陽に分かれた時、入声だった漢字も他の声調に移ったが、この移動先は基本的に頭子音が有声、無声、鼻音のどれなのかで決定した。無声音であれば無気有気を問わず上声に、有声音ならば陽平声に、鼻音は去声に変わった。あくまで基本的な変化であり、例外もある。入声と共に破裂音の尾子音も消え、現代の普通話には残っていない。日本語における尾子音の変化については後述する。

2.2 日本語の音韻史

2.2.1 日本語の音韻構造

日本語の音韻構造は頭子音、拗音の /j/、母音、尾子音と高低アクセントからなる。尾子音は撥音 /N/ と促音 /Q/ に限られ、更にいえば促音 /Q/ で終わる例はオノマトペなど一部に限られる。総じて中国語に比較して閉音節は少ない。

2.2.2 漢字の伝来

日本語の音韻史については林（2009）を中心に概観する。漢字は数度に渡って複数箇所から日本に入った。伝来時期によって「古音」、「呉音」、「漢音」、「唐（宋）音」の4種に分けることができる。

「呉音」は6、7世紀に朝鮮半島経由で日本に伝わって生まれた漢字音である。原音は主に5、6世紀に揚子江下流域（林，2009，p.193）で話されていた中国語音だが、一括で日本に入って来た訳ではなく、漢字音毎に起源となる時期や場所は異なる。ただ、伝来時期が中国語での無声化より前である為、有声無声を保存している点は呉音全体の特徴である。漢音が入った後の平安時代には日本語化が進んだ音として、「和音」とも呼ばれた（林，2009，pp.192-193）。

「漢音」は8、9世紀初頭、中国から直接伝わった音を母体とする。原音は7世紀以降、

長安を中心とする西北方言（林，2009，p.193）であり、「唐代長安音」と呼ばれる。呉音と異なり、中国語学習者達によって取り入れられた為、一箇所から一度に伝来した漢字が多く、音韻上の揺れが少ない。伝来時期の関係から唐代に中国語で起きた変化が反映されている。尚、「漢」と称してはいるが、国名の漢とは無関係であることに注意されたい。

「唐（宋）音」は13-18世紀半ばに伝わる。10世紀以降の中国語音を基盤とするが、呉音同様に起源となる時期、場所の範囲が広い。伝来した時点で日本語にはそれまでの漢字音が浸透していた為、使用場所は仏教用語などに限られた。

2.2.3 は行の変化

現代日本語で清濁は有声無声とはほぼ一致するが、は行とば行のみ、無声声門閉鎖音[h]と有声両唇破裂音[b]で有声無声の関係にない。このことから、当初、は行は、[b]の無声音である[p]であったと考えられている。その[p]が唇を緩めて発音されるようになり、両唇摩擦音である[ɸ]に変わった。これを「唇音退化」という。但し「ひ」は[ci]に変化した。その後、は行は、語頭にあるか、語中にあるかでも発音が変わるようになる。これを「は行転呼音」という。

3. 研究の目的と方法

これまで述べて来た様に日本語と中国語では音韻構造が大きく異なる。日本語では頭子音、半母音、母音、尾子音（撥音 /N/ と促音 /Q/ のみ）で1音節をなし、そこに高低アクセントが加わるが、中国語においては頭子音、半母音、母音、尾子音に声調で1音節という構造を取る。ここで疑問となるのは、この様に音韻構造の異なる言語から語彙を輸入した時、その音はどの様に変化するかということである。こうした動機により、変化の明確な尾子音に注目して分析することにする。また構造以前に音素でも相違点があり、片方にのみ存在する音素の変化についても子音に絞って取り上げる。尚、中国語と日本語の何れもそれだけでは広範囲になる為、今回は呉音、漢音とその母体となった中国語、及び現代の日中の共通語に絞り込み、その他の方言については軽く触れるに留める。

4. 本 論

4.1 尾子音の開音節化

音節の内、子音で終わるものを「閉音節」といい、母音で終わるものを「開音節」という。そして閉音節の尾子音に何らかの操作を加えて、音節が母音で終わる様に変化させることを「開音節化」という。

中国語の中古音には p, t, k, m, n, ŋ の 6 種の尾子音が存在したが、奈良時代の日本語は尾子音を許容していなかった。「万葉仮名」では尾子音が脱落する形で開音節化した。他方で尾子音を脱落させずに開音節化させる「二合仮名」も見られた。平安時代に入ると中国（隋、唐）を国の規範とする流れができ、その一環で漢字も中国語の通りに閉音節での発音が試みられる様になった。この結果、日本語にも撥音 2 種と促音といった特殊音素が生じた。室町時代に入ると「連声」が盛んになり、漢字だけでなく助詞にも生じる様になった。この他、尾子音 t を促音で表す試みや漢字 1 文字のみでも「母音添加」によって開音節化させる動きが見られる。江戸時代に入ると完全に開音節化される様になった（林, 2017, pp.77-91）。以下にそれぞれの開音節化について詳細に見ていく。

4.1.1 万葉仮名

万葉仮名は平仮名、片仮名が生まれる前、日本語の音を表していた漢字のことである。万葉仮名も時期によって以下の 3 種に分けられる。

- (1) 推古朝（592-628）前後の碑文及び歌謡での万葉仮名で、中国語の上古音に似る
- (2) 『古事記』（712）、『万葉集』（759 年以降）での万葉仮名で、呉音に似る
- (3) 『日本書紀』（720）での万葉仮名で、漢音に似る

日本語の音を表すという役割もあり、この万葉仮名は原音の尾子音を保存しなかった。「安」や「遍」ならば末尾の撥音が脱落して「ア」、「へ」、「末」や「八」ならばやはり尾子音 t を抜いて「マ」、「ハ」の音を表した（藤堂, 1980, pp.157-166）。

4.1.2 二合仮名

二合仮名とは、子音で終わる漢字の後に同じ子音で始まり母音で終わる漢字を付加することで開音節化させる方法である。例として埼玉県稲荷山古墳出土の鉄剣銘文にある「獲居」と「獲加」、地名の「甲斐」が挙げられる。「獲」は k で終わり、「居」と「加」は k で始まり母音で終わる。つまり「獲」の後にこれらの漢字が続くと子音が重なって母音で終わる、-/kkV/ の形になる。同様に「甲斐」も「甲」は p で終わり、「斐」は

pで始まり母音で終わる（犬飼，2008）。『漢語林』を引くと、「獲」は入声の「陌」韻、「甲」は入声の「洽」韻に分類されており、確かにそれぞれ k, p で終わっていた傍証にできる。尚、現代日本語で「甲」は /u/ で終わるが、これは先述したは行の変化を受けてのものである。「居」と「加」も日本語において k で始まっており、やはり妥当と考えられる。尚、普通話では /tɕ/ で始まっているが、これは中国語で清代以降に /k/ が口蓋化したことによるものだろう。

4.1.3 連声

連声とは尾子音が t, m, n の何れかの漢字に母音で始まる漢字が続いた時、2文字目の母音の前に1文字目の尾子音が新たに加わる現象のことである。半母音については消滅するものと残存するものとが存在する。湯澤他（2017）から例を、IPA 表記に変更した上で以下に引用する。

[t] : 「屈惑」 /kut-waku/ → /kut-taku/, 「雪隠」 /set-in/ → /set-tin/
[m] : 「三位」 /saN-wi/ → /saN-mi/, 「陰陽」 /woN-joR/ → /woN-mjoR/
[n] : 「因縁」 /iN-en/ → /iN-nen/

連声は漢字の読みを当て字で表記する形式でも記録されており、古くは『和名類聚抄』（10世紀）中の「浸淫瘡 心美佐字」にて、「浸」の尾母音と「淫」の母音がまとめて「美」と記述されている。こうした記録から連声が盛んになった時期は12-16世紀頃と見られている。この頃には漢語だけでなく、漢字と助詞の組み合わせでも連声が起きた。「今日は」が /koN-nitta/ という具合である。また日本語で生じた /m/ と /n/ の混同に伴い、上記の「陰陽」が「オンニョウ」と記述する文献も登場した（安部，2017）。

尚、連声で2文字目の頭に /w/ があれば消滅し、/j/ であれば保存されている理由については、合拗音の消滅と関係している可能性が考えられるが、先行研究は発見できなかった。

4.1.4 閉音節の尾子音が破裂音の場合

これまで二合仮名、連声と見て来たが、両者ともに2文字の漢字を組み合わせたの開音節化である。2文字目の漢字は特定の子音、または母音で始まっていなければならない、2文字の組み合わせには限界があり、必然的に1文字で完結する開音節化が登場した。

中国語の中古音では尾子音に破裂音 p, t, k の3種を認めていた。この内、t は日本語でも室町時代末期まで尾子音として発音されていた事例が存在する（安部，2017）。実際に『日葡辞書』（1603）には「fotnet（発熱）」といった例が見られる（湯澤他，2004）。この他、世阿弥の自筆に t を「っ」で表す例が見られ、連声の節で見た様に、室町時代に盛んになった連声にも含まれている。また t は k と共に母音添加によっても開音節化した。一方で p は、は行の変化を受け、母音に変化する形で開音節化した。

さて t, k に生じた母音添加に注目すると、尾子音の直後に /i/ または /u/ を添加することで開音節化している。なぜこの2種の母音であるかの説明は管見の限りでは発見できなかった。参考までに、英語由来の外来語の場合、尾子音の後には /i/、/o/、/u/ の何れかが付く。添加する母音は目立たない音として弛緩母音、特に /u/ が好まれる。但し後部歯茎音 /s/, /ʒ/ は舌が前に出て来る為、前舌母音 /i/ が続く。尚、歯茎音 /t/ または /d/ の後、/u/ が来ると [tsu] と子音が変わる為、これを避けるべく代わりに /o/ が付くとされる（榎本，2006）。日本語の漢字音の場合、唐代半ば以前、日本でいえば平安時代（794-1192 頃）の日本語では単純に [ti]、[tu] であったと推測しており、/i/、/u/ を付けても頭子音を変えずに開音節にできたとの主張がある（湯澤他，2004）。このことも漢字音の開音節化に /o/ が登場しない一因ではあるだろうが、/o/ より /i/、/e/ が好まれた理由は不明なままである。

さて尾子音 t, k への母音添加にあたって、/i/ と /u/ のどちらが付くかの法則はある程度判明している。尾子音が t の場合、t に続く母音は大半が /u/ であり、/i/ は t の直前の母音が /a/、または /i/ であった時に稀に添加される。下表に例を示すが、-/ati/ は1例のみ、-/iti/ にしても4例のみである（Itô et al., 1996, pp.19-21）。尚、尾子音 t を持つ漢字の例は全て呉音であり、呉音の中には「越（/woti/）」、「勿（/moti/）」など、t を挟んで /o/ と /i/ が隣り合う例が存在するが、これらの存在についての言及はされていない。更なる研究が要されると見られる。

表 4 尾子音 t への母音添加の法則

漢字	/-ati/	漢字	/-iti/
八	/hati/	一	/iti/
		七	/siti/
		日	/niti/
		吉	/kiti/

表 5 尾子音 k への母音添加の法則

/CVk(u)/		/CVk(i)/	
着	/tyaku/	敵	/teki/
育	/iku/	力	/riki/
福	/huku/		
北	/hoku/		

Itô et al. (1996) はこうした分析結果から次の仮説を立てている。基底において閉音節はまだ母音添加されていないが、尾子音が連声といった形で開音節化しない場合、尾子音の直後に /u/ が添加される。但し、この閉音節が k で終わる場合、k の直前にある母音が前母音、特に /e/ であれば、この母音の影響で k の直後にある母音は後母音 /u/ ではなく前母音 /i/ となる。

歴史的観点から見ると、呉音にて既に破裂音の尾子音に /i, u/ の母音添加が見られる。漢音になると尾子音 t に添加される母音は /u/ で統一されるようになった。先に挙げた例も呉音では /i/ で終わる一方、漢音では /u/ が来るようになっている。下表は『漢語林』での呉音と漢音の表記を音韻論のものに変更して並べてある。

表 6 尾子音 t への母音添加の変化

漢字	呉音	漢音
一	/iti/	/itu/
七	/siti/	/situ/
日	/niti/	/zitu/
吉	/kiti/	/kitu/

尚、p は語頭にはないは行、即ちは行転呼音と捉えられて /w/ に変換し、母音添加は行われていない。

中国語では唐代 (618-907 [湯澤他, 2004]) の半ばまで尾子音が破裂音の p, k, t のいずれかである漢字が存在したが、入声の消滅の節で触れたように、唐代にそれらの尾子音は消滅し、母音で終わるようになった (大島, 2011)。日本語には尾子音が消滅する前に輸入され、当初は原音の通りに発音していた。

表 7 尾子音の変化

尾子音	漢字	平水韻 (中古音)	呉音 (カッコ内は歴 史的仮名遣い)	漢音 (カッコ内は歴 史的仮名遣い)	唐音	普通話
-p	十	入声 緝韻	/zjuR/ (ジフ)	/sjuR/ (シフ)	/sin/	/ɕi/
-k	駅	入声 陌韻	/yaku/	/eki/	—	/i/
	六	入声 屋韻	/roku/	/riku/	—	/liou/
-t	八	入声 黠韻	/hati/	/hatu/	—	/pa/
	発	入声 月韻	/hoti/	/hatu/	—	/fa/

4.1.5 閉音節の尾子音が鼻音の場合

中古音の尾子音 m, n, ng は呉音では脱落することが多かった。例えば /eŋ, jeŋ, riɛŋ/ の何れかで終わる漢字音は、あ段で音写しており、/ŋ/ が脱落している。一方で脱落しなかった例も見られ、尾子音 m では「心 (/sjəm/)」が /simi/、尾子音 n では「丹 (/tan/)」が /tani/ と /i/ を添加する形で残されている。m については「三位」が「サムミ」と表記され、「三」が /sam/ と捉えられていたことも分かっている。ŋ は「双六」の「双 (/srɔŋ/)」が /sugo/ と同じ軟口蓋音で音写されることがあった（藤堂, 1980, pp.167-168）。

平安時代、漢字音を輸入する中で、日本語に /m/ と /n/ の 2 種の撥音が生じた。12 世紀から /m/ と /n/ は混同され出して、13 世紀にはこの 2 種は /N/ に統合された。また [ŋ] も鼻音性を無くした（安部, 2017, pp.82-86）。中央語の文献では院政期、遅くとも鎌倉時代初期まで /m/ と /n/ を区別したが、12 世紀に入ると『文鏡秘府論』（1138）で尾子音が m の「任」が /sin/、n の「允」が /imu/ とされるなど混同され始め、13 世紀には一般化した（沖森他, 1989, p.22）、（沖森他, 1989, p.73）。当時新たに生まれた漢字音、漢音では m, n の何れも /N/ と表記される様になり、/mu/ と /nu/ で書き分けることは減った。例として「金」と「近」は原音では尾子音がそれぞれ m と n で異なっているが、漢音では同様に /N/ と見做された。しかし /ŋ/ は /N/ ではなく、直前の母音が /o, a, ə/ であれば /u/ で、/e, ɛ/ であれば /i/ で音写された（藤堂, 1980, pp.170-171）。この対比は中国語で一貫して ng で終わる「明」、「清」に見ることができる。中古音の記録である『平水韻』では何れも庚韻、現代の普通話ではそれぞれ /min/、/tɕʰiŋ/ だが、日本語では呉音がミョウ（ミャウ）、ショウ（シャウ）、漢音がメイ、セイ、唐音

で漸くミン、シンになる（湯澤，2004）。/ŋ/のみ /N/での音写が遅れた理由には、漢音の元となった唐代長安音にて、この音が直後に /j, w/ を付けて発音され、鼻濁音より鼻母音に近くなったことが考えられる。現代の西北の方言の共通語、いわゆる官話においても鼻音ではなく母音として残されている（藤堂，1980，pp.170-171）。

漢字音の変化は地名にも見ることができる。例えば713年に朝廷が「畿内七道諸国郡郷名著好字」という詔を出し、地名に良い意味を持つ漢字を使うことを奨励した。これを受け、「針間」は「播磨」という表記に変更した。この「播」は『漢語林』によると呉音で「ホン」、漢音で「ハン」であり、何れにせよ /N/ で終わる筈である。しかし、犬塚（2008）は n が r に変わり、その後に i が付いて「ハリ」と読むようになったとし、この変化は n と r が共に舌先が上顎に近付くことに起因すると推測している。日本語において語末に来る /N/ は有声口蓋垂音の [N]、マ行の前の /N/ は有声両唇音の [m] で発音される点については、いずれにせよ鼻音であることには違いなく、古代日本では特に区別されていなかったと述べている。これについては更なる検証を要すると見られる。犬飼（2008）はまた朝鮮半島では t が r に変わる例もあり、この影響も n から r への変化に反映されている可能性を提唱している。

4.2 頭子音の変化

頭子音は尾子音と異なって、中国語と日本語のいずれも許容しており、中国語の頭子音が変わらず日本語の漢字音に残っていることも多い。しかしながら中国語にあって日本語にない音素、またその逆は存在し、受容にあたってそれらの音素は変化した。

4.2.1 清濁における変化

中国語の中古音の清濁では無気有気を区別するが、日本語に有気音の音素は存在しない為、無声阻害音であれば無気有気問わず同じ音素で受け止められた。

また中国語で起きた無声化は清濁を有声無声ではなく声調で再分類したもののともいえるが、無声化した後に伝来した中国語音（唐代長安音など）を基盤とする漢音では単純に無声無気音、無声有気音、有声音の合流である。

表 8 呉音、漢音、普通話に見る有声音の無声化

漢字	呉音	漢音	普通話
倍	/bai/	/hai	/pei/
大	/dai/	/tai/	/ta, tai, t ^h ai/
害	/gai/	/kai/	/xai/
在	/zai/	/sai/	/tsai/

4.2.2 唇歯音の変化と直音化

中古音には唇歯摩擦音 /f, v/ が存在するが、日本語はこれらを音素として持たない。高松（1987）はこれらの音を /h, b/ で受け止めたとしている。/f, v/ の直後にあった介母 /i/ は消滅して直音化、または主母音ごと変化したとし、次の例を挙げている。この変化が生じた場所が中国語なのか日本語なのか判然としなかったが、一先ずここに挙げておく。

表 9 唇歯音の発生に伴う直音化

	頭子音が /h/, /b/ 以外	頭子音が /h/, /b/
「東」韻	雄（イウ）、宮（キウ）、衆（シウ）、虫（チウ）、隆（リウ）	風（フウ）、馮（フウ）
「陽」韻	陽（ヤウ）、向（キヤウ）、上（シヤウ）、長（チヤウ）、量（リヤウ）	方（ハウ）、望（パウ）
「尤」韻	尤（イウ）、丘（キウ）、周（シウ）、丑（チウ）、流（リウ）	不（フ）、負（フ）
「元」韻	猿（エン）、元（グエン）	反（ハン）、万（バン）

4.2.3 脱鼻音化

唐代長安音で起きた無声化により、鼻濁音が生じたことは既に述べた。当時の中国には日本からの留学生が存在し、彼らが日本へ持ち帰った新たな漢字音が漢音の原型になるのだが、この時、鼻濁音は濁音 /b, d, g/ として認識された。つまり漢音に含まれる有声音は原音では元々鼻音であり、無声化する前の有声阻害音ではない。呉音と漢音を比較してもそれは明らかである。

表 10 鼻音から有声阻害音への変化

漢字	呉音	漢音
未	/mi/	/bi/
馬	/ma/	/ba/
男	/naN/	/daN/

しかし全ての鼻音が有声阻害音に変化したかといえそうではなく、尾子音が /ŋ/ であった場合は鼻音のままであり、「明」、「寧」の頭子音はそれぞれ /m, n/ のままである。この他、呉音での読みを捨て切れず鼻音のままであった例もあり、『日本書紀』の万葉仮名では「摩」は /ma/、麼は /ba/ という様に呉音と漢音の読みが混在している（藤堂，1980，pp.169-170）。

4.2.4 喉音 /x, ɣ / の変化

「海」という漢字について、中国語の中古音では /xʌi/、日本語の呉音と漢音では /kai/、外来語としての「上海」は /hai/ と読まれている。これらの頭子音が異なる事象について、湯澤は次の説を述べている。中国語の中古音での発音は無声無気軟口蓋摩擦音 [x] だったが、近世音の時代に声門摩擦音 [h] と発音されるようになった。日本語では呉音、漢音ともに [k]、[g] に転写された。これは「呼」、「許」の例にも見られる。そして中国語での [x] の変化が生じた後に輸入した「上海」は日本語でも /h/ と発音されるのである（湯澤他，2004）。

藤堂はより詳述しており、唐よりも後、宋の時代の中国において、喉音清音の /x/ は北方方言では [x]、南方方言では [h] と発音されたとする（藤堂，1980）。上海語は南方方言に属する為、「上海」という語の読みが日本に伝わる際、[h] で伝わったのだろう。同じく喉音で濁音の /ɣ/ は漢音が母体とする北方方言では [ɣ]、呉音が母体とする南方方言では [ɦ] と発音され、日本語においてはそれぞれ /w/ と /k/ で対応している（藤堂，1980）。

4.2.5 半歯音 /ɳz/ の変化

中国語の音韻史で触れた様に、/ɳz/ は当初 [n] に近い音であったが、後に [z] へと変化した。日本語は子音の連続を許さない為、呉音では /n/、漢音では /z/ が原音の

/ńz/ に対応した。藤堂（1980, pp.199-200）は厳密には有声そり舌側面音 [r] であるが、日本語話者には有声歯茎摩擦音 /z/ に聞こえたのだらうと推測している。

表 11 /ńz/ の変化

漢字	呉音	漢音	普通話
日	/niti/	/zitu/	/zǐ/
人	/niN/	/ziN/	/zen/
然	/neN/	/zeN/	/zan/
熱	/neti/	/zetu/	/ze/

4.2.6 拗音

奈良時代の日本語には拗音が存在しなかったと見られる。但し資料が和歌、歌謡に限られる為、断言はできない。平安時代に入って漢字音が一般的になると、j を含む母音連続、「開拗音」と、w を含む母音連続、「合拗音」が日本語に現れるようになった（林, 2009, p.79）。まだ拗音が一般的でなかった頃の産物である万葉集での万葉仮名は、原音で介母を含む漢字音を、下表の通りに変換し直音化させた。w を含む漢字音は万葉仮名においてはエ乙の音のみを当てられている一方、j を含む漢字音は全ての音に分布し、主母音の特徴によって充てがわれる音が決定された。

表 12 万葉集での万葉仮名における直音化

	甲	乙
イ	/ji, je, jen, jet, jej/	/rji, rəj, rje, rjej, rjen, rjet, rjej/
エ	/ji, je, jej, jen, jet/	/wəj, rje, rji, rjet, rjo/
オ	/rjon, rjok, jew/	/rjəŋ, rjej, rjo/

呉音でも多くは直音化している。例えば両唇音の後の w は脱落し、「半」は /pwan/ から /haN/、「盤」は /bwan/ から /baN/ にそれぞれ変化している。j を含む漢字音においても、/jej/ は /a/、稀に /e/ で転写し、「祭」は /cej/ から /sai/ に変わっている。尚、/jen, rjen/ は母音を /a/ で、尾子音を /u/ で受け止めた結果、/j/ を含む形で発音されるが、原音の介母を保存しているというよりは単に /eu/ と続いた結果、拗

音便が生じたと見られる。この例には「明」の /mjɛŋ/ が呉音では /mjoR/ に変化していることが挙げられる。因みにこの音変化は呉音特有であり、類似例は現代の広東語、福建語などに限られている。更に /rwən/ も /o/ で写している。この例としては「聞」の /mrwən/ から /moN/ への変化が存在する。一方で少数派ではあるが、拗音として保存された例も存在する。例えば「過」は原音では /kwa/ だが、呉音では /ka/ と /kwa/ の両方の読みを許容している。「元」も /gwaN/ と /gaN/ の2種の読みが存在し、前者の方が原音に近いが、『阿豆河庄上村百姓等言上状』では後者の表記を採用しており、表記ぶれは珍しいものではなかった。

漢音では介母の脱落に一定の規則が見られる。例を挙げると、先述した「元」を含む3・4等両属韻に属する漢字音は漢音では直音化され、呉音のように合拗音として表記されることは稀になった。表13を見ると、合拗音が許容されていたか行、その中でも最も遅くに消滅した /kwa/ は介母が保存される傾向にあること、それでも全体的に2つ以上の介母は脱落し易いことが分かる（藤堂，1980）。

表 13 介母の漢音での変化

	w	j	jw	rjw
t	「端」 /twan/ → /taN/			
s	「酸」 /swan/ → /saN/	「仙」 /sjɛn/ → /seN/		「水」 /srjwi/ → /sui/ 極稀に /swi/
k	「官」 /kwan/ → /kwaN/ または /kaN/		「絹」 /kjwen/ → /keN/ 「均」 /kjwen/ → /keN/	「亀」 /krjwi/ → /ki/ 稀に /kwi/

5. 結 論

以上が日本語に伝来した漢字音の変化をまとめたものとなる。日本語の漢字音は伝来時期によって数体系に分けられる。漢字音が日本語に流入している間も、中国語では様々な変化が生じ、日本語の漢字音の各体系間に差異を生み出す一因となった。特に漢音の母体となった唐代長安音は中国語音韻史の中でも特に音変化が集中している箇所であり、それを反映する漢音と、反映していない呉音の間には、有声無声を始めとして多

くの相違点が見受けられた。

また中国語と日本語とでは音韻構造が異なる為、日本語に入るにあたっても音変化が起きた。当時の日本語は現代日本語とも異なっており、ある漢字音が伝来した時に起きた音変化について、当時の日本語の姿を踏まえて検証する必要があった。尾子音 p にしても現代では /u/ であるが、その過程には日本語では行の変化が関係していた。この他、中国語の介母と日本語の拗音は、一般言語学でいう半母音を含む点で共通するが、拗音は必ずしも介母に対応している訳ではなく、日本語で音便が生まれたことを受けて登場した例も存在することが明らかになった。

母音添加では結局、なぜ /u/ と /i/ が用いられるのか、調査不足に終わった。今回扱えなかったこととしては次の3点が挙げられる。先ず連声と共に取り上げられることの多い音韻現象として「連濁」が存在するが、これが生じる条件が複雑過ぎると判断し、今回は見送った。次に頭子音の /r/ は奈良時代の日本語では認められていなかったが、漢字音の流入で平安時代には許容される様になった点を取り上げる予定だったが、原音でどの音であったか裏付けが取れず、本稿から外すことにした。そして中国語と日本語の大きな違いであるアクセントについても、声調からどう高低アクセントへと変遷したかについて先行研究を発見できず、調査を断念した。

以上、日本語における尾子音、頭子音の扱いについて概観し、尾子音への母音添加を音韻論から分析した場合と歴史言語学から分析した場合とで、結果が大きく変わることを示した。

参考文献

- 安部清哉 (2017)「音韻史」『日本語の音』沖森卓也, 木村一編 朝倉書店 pp.76-98
- 安部清哉、加藤大鶴 (2017)「語形と音変化」『日本語の音』沖森卓也, 木村一編 朝倉書店 pp.99-132
- 犬飼隆 (2008)『漢字を飼い慣らす 日本語の文字の成立史』人文書館
- 榎本正嗣 (2006)『現代日本語発音の基礎知識』学文社
- 大島正二 (2011)『中国語の歴史』大修館書店
- 沖森卓也、金子彰 (1989)「鎌倉時代の日本語」『日本語史』沖森卓也編 おうふう pp.19-24
- 沖森卓也、金子彰 (1989)「文字史」『日本語史』沖森卓也編 おうふう pp.45-62
- 高松政雄「日本の漢字音」『漢字講座 = 3 漢字と日本語』佐藤喜代治編 明治書院 pp.55-81
- 藤堂明保 (1980)『中国語音韻論 その歴史的研究』光生館
- 沼本克明 (1986)『日本漢字音の歴史』東京堂出版
- 林史典 (2009)「古代語の音韻・音韻史」『日本語要説』工藤浩他著 ひつじ書房 pp.159-184
- 望月八十吉 (1974)『中国語と日本語』光生館
- 柳田征司 (2003)「第3章 音韻史」『朝倉日本語講座3 音声・音韻』上野善道編 朝倉書店 pp.43-60
- 湯澤賢幸、松崎寛 (2004)『音声・音韻探求法—日本語音声へのいざない—』朝倉書店
- Itô, Junko & Mester, Armin (1996) "Stem and word in Sino-Japanese" Takashi Otake and Ann Cutler (Eds.) *Phonological Structure and Language Processing*. Walter de Gruyter & Co. pp.13-45

Abstract

Kanji characters used in today's Japanese originally came from Chinese, whose sound system is different from that of Japanese in many ways. The question here is how Japanese turned their sounds Japanese-like, when adapting Kanji characters. This paper shows the history of Kanji characters in Japanese, their sound changes from the original words, and the residues of old Chinese in Japanese which disappeared or were fading away in modern Chinese. Japanese borrowed Kanji characters from Chinese in stages over hundreds of years while Chinese and Japanese developed their respective sound systems. It is therefore impossible to illustrate sound changes of a certain Kanji character without knowing what Chinese and Japanese were like when that character was taken into Japanese. Therefore, the author consulted references not only on general linguistics but also on sources from Japanese and Chinese linguistics. The problem is that each field has its own terminology and to standardize them required the author to have enough knowledge to check all the definitions of the terms. All the same, to see one question from several angles brought about a new viewpoint. For instance, when focusing on the vowel addition to final consonants, Japanese linguistics is good at a historical analysis whereas general linguistics has shown a survey focused on the sound combinations in Present-day Japanese. Such interdisciplinary survey methods can be applied to compare more hypotheses and find some new approach in future investigations.